

黒壁“長浜”～多様な主体がまちを変える～

NPO法人 まちづくり役場 理事長 山崎 弘子

1. 地域づくりの方針・目的

昭和40年～50年代の高度成長期、車社会と大型店進出問題等で長浜においても中心市街地が衰退した。都市の独自性や魅力づくりを考えるなかで、市と民間がまちづくりの理念を共有していくための哲学といってもよい「博物館都市構想」が昭和57年に策定された。「伝統を現代に生かして美しく住む」。この構想により長浜のまちづくりが胎動するきっかけとなり、長浜城の再興、黒壁の保存運動へとつながっていく。

2. 取り組み内容

長浜は秀吉が開いたまち。秀吉の城長浜城は、徳川の時代に取り潰されて彦根に移された。城の再建は市民の夢。

総事業費10億円のうち総額4億3000万円を市民が寄付し昭和58年に完成した。さらに5年後、まちなかにあった明治時代の銀行「国立百三十三銀行」を保存。第3セクター株式会社「黒壁」が設立された。ガラスを始めたことにより外から人が訪れ商店街に活気が戻ってきた。

3. 苦労点・達成度等

保存だけなら行政でできる。活用するための知恵やアイデアを民間に期待して長浜市は黒壁の運営をすべて民間人に任せた。しかし「ここで何を始めればいいのか?」、出資者8人は悩んだ。江戸から明治にかけて文明開化を先取りする勢いのあるまちの衰退原因は郊外化。大型店と同じことをしていても勝てない。そこで、黒壁のコンセプトが生まれた。「歴史性・文化芸術性・国際性」、偶然に決まった「ガラス」だが、長浜にとっては救世主的、斬新で博物館構想の理念と合致していた。

4. 効果・反響等

「長浜の第3セクター会社がまちおこしにガラスを始めた!」NHKをはじめ雑誌、新聞、その他のマスコミ効果がやがて200万人を超える人を呼び、地方都市のイメージを高めた。問題の共有化、官民の連携、経済効果ははかりしれない。

5. 今後の課題

商店街が観光地になっても市民の足は遠のいたまま。しかし、もし黒壁が解体されていたら両者ともに訪れてはいない、全国どこのまちも抱えている問題で悩んでいただろう。地方都市再生のモデルとなった長浜の今後の課題は「持続する」「不易を守る」「通過型から宿泊型へ」、交流人口を増やしさらに魅力的な都市を目指したい。

滋賀県長浜市



中心市街地の成立

- ・秀吉の造った城下町
- ・楽市楽座で栄える



中心市街地の衰退

- ・高度成長期の車社会化・大型店進出が影響
- ・ひと4人・犬1匹しか通らないまちに

博物館都市構想

きっかけは
市民の寄付による
長浜城の再興



長浜市
S57年「博物館都市構想」へ

テーマ

「伝統を生かして美しく住む」

市民&行政で

まちづくりに取り組む

長浜市の長期的な

都市政策の指針



黒壁立ち上げの機運に

第3セクター「(株)黒壁」



- ・ 資本金1億3000万円
市 4000万円
民間 9000万円
- ・ 旧銀行を活用しガラス文化発信の拠点に
- ・ 現在、年間200万人を集める観光スポットに

黒壁のコンセプト

- ・ 大型店には真似の出来ないこと
- ・ お金で出来ないこと
- ・ 地域の産業を圧迫しないもの

- ・ 歴史性
- ・ 文化芸術性
- ・ 国際性

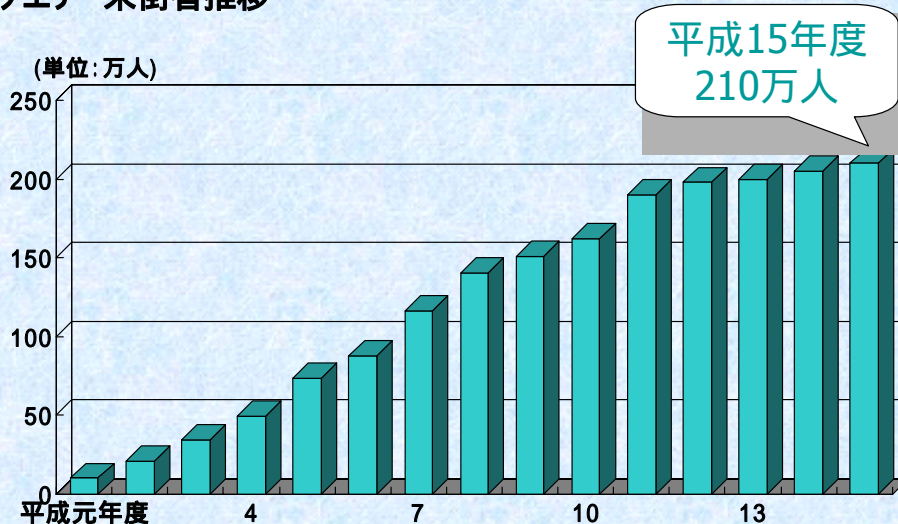
株式会社黒壁

地元企業8社の出資
民間主導の経営

地元の人材起用
女性の雇用創出

効果と反響

黒壁スクエア 来街者推移



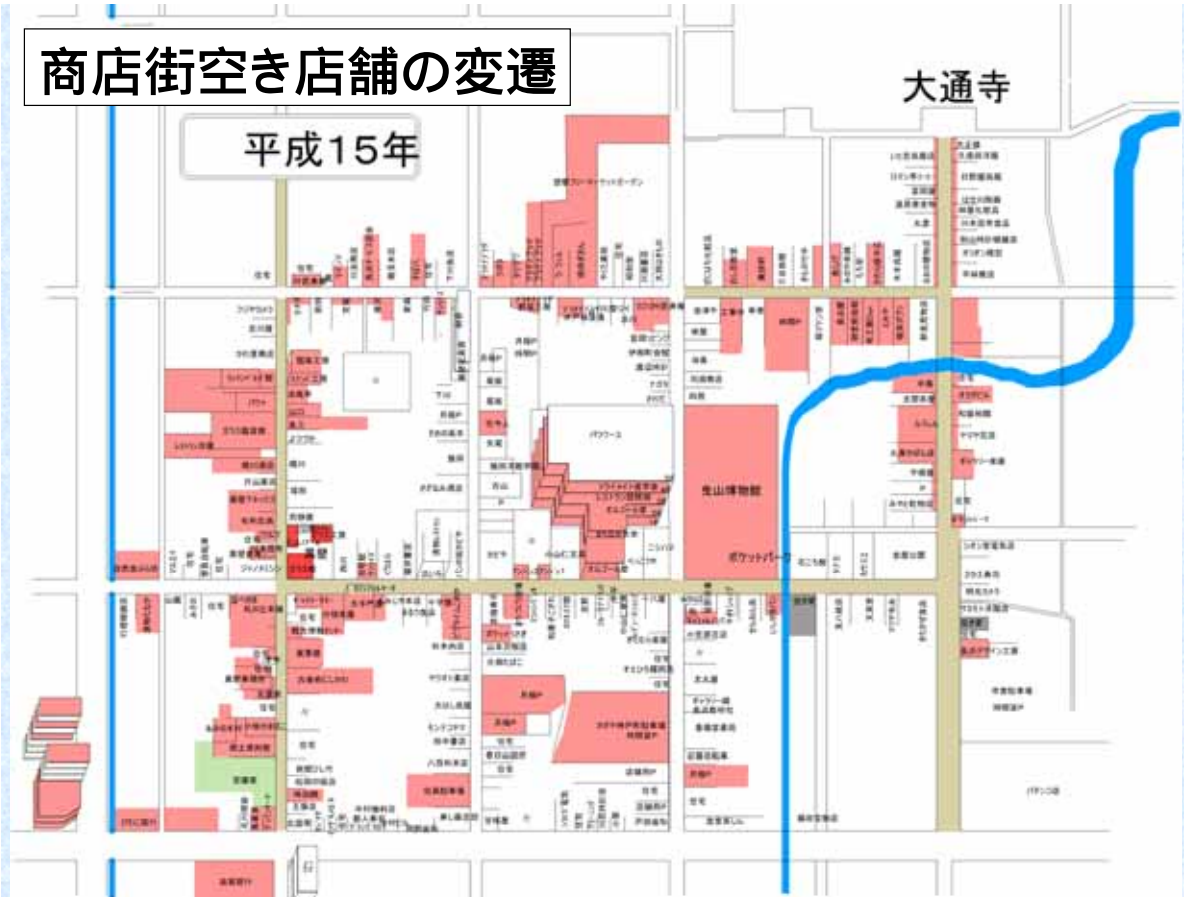
商店街空き店舗の変遷

平成元年

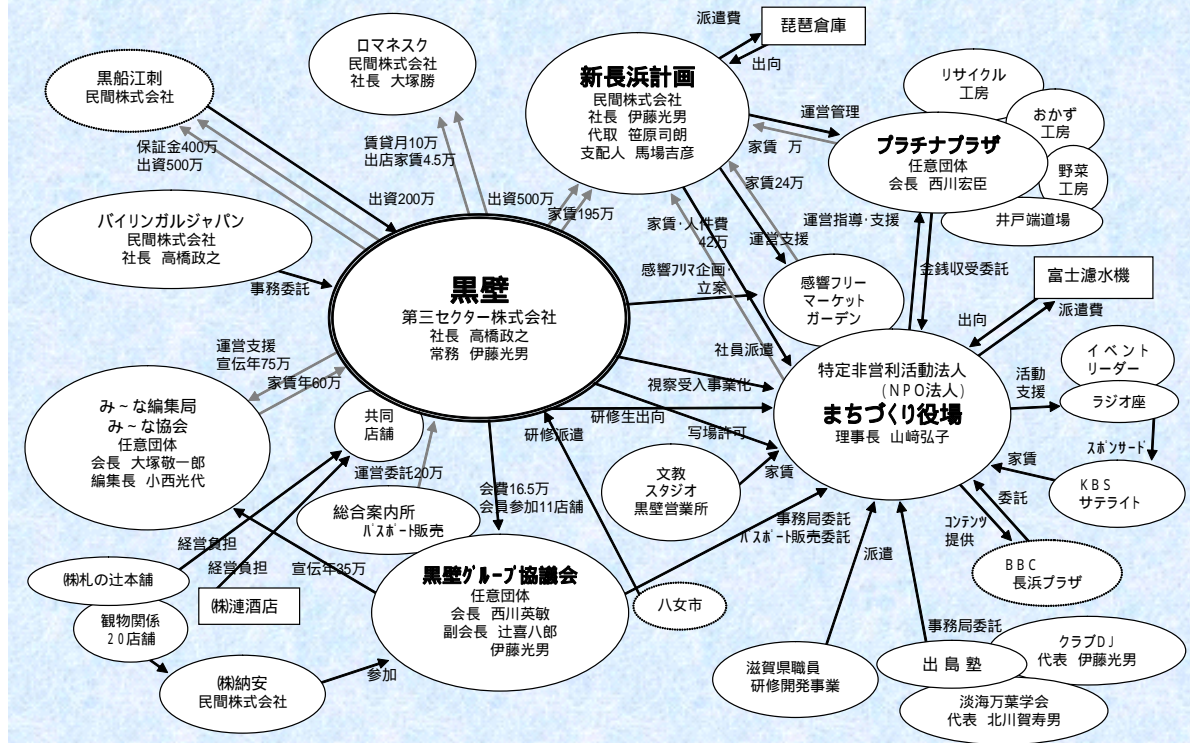


商店街空き店舗の変遷

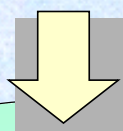
平成15年



黒壁との関係図(多様な主体)



長浜の現在 これからの課題



200万人以上の観光客
 帰ってきた後継者たち
 商店街もヤル気満々
 新たな地場産業の創出
 住みよいまち日本一
 でも、続かないと。